病院移転に伴うBCP策定のための基礎調査

岩手医科大学附属病院　中央放射線部　○阿部　裕平(Abe Yuhei)
岩城　龍平　武田　雅之　佐々木　忠司

【はじめに】

2019年9月、当院は盛岡より約10 km離れた矢巾町へ病院移転を行った。移転直後は人員異動や引っ越しをする職員が多く、正確な参集時間の把握が難しかった。2023年に人員異動などが落ち着いたため、BCP更新のために参集時間の調査を行うこととなった。

【目的】

当院放射線部におけるBCP策定更新のための参集時間調査と問題点の洗い出し行う。

【方法】

診療放射線技師59人に、平時の通勤手段、平時の通勤時間、自宅から勤務先までの徒歩での通勤時間、自宅から勤務先までの距離、緊急時（災害等）に点検対応できるモダリティの5項目をアンケート形式で調査を行った。

【結果】

平時の通勤手段は車41人、自転車7人、電車4人、バイク1人であった。平時の通勤手段では50%参集に20分、80%参集に40分という結果であった。自宅から勤務先までの距離は1 km圏内に4人、1～5 km圏内に13人、5～10 km圏内に21人、10 km以上が21人であった。徒歩における自宅から勤務先までの通勤時間は50%参集に100分、80%参集に180分という結果であった（Fig.1）。年代別による参集時間は50%参集では20代は60分、30代は110分、40代以上は120分という結果となった（Fig.2）。緊急時に点検対応できるモダリティはそれぞればらつきのある結果となった。各モダリティで2人参集するまでの時間は一般撮影、救急センター、CT、透視、手術室に比べて、MRI、Angio、核医学、治療で長く、3人参集するまでの時間も一般撮影、救急センター、CT、透視、手術室に比べて、MRI、Angio、核医学、治療で長い結果となった（Fig.3）。

【考察】

平時の通勤手段は公共交通機関の使用は1割のスタッフのみのため、公共交通機関が使用不可となった場合でも道路状況が保たれていれば9割のスタッフが平時と同様の手段で参集可能ということが分かった。参集時間の年代による差異は40代以上のスタッフの多くは移転前の病院周辺に住居があり、30代以下は移転後の病院周辺に住居があるためと考えられる。そのため夜間休日における災害発生時の初期対応は若手～中堅が指揮する必要性が示唆された。点検対応できるモダリティがAngio、MRI、核医学、放射線治療で人数が少なかった原因は、配属者の多くが40代以上であり居住地が病院と離れていること、ローテーションの少ないモダリティであることが原因と考えられる。その

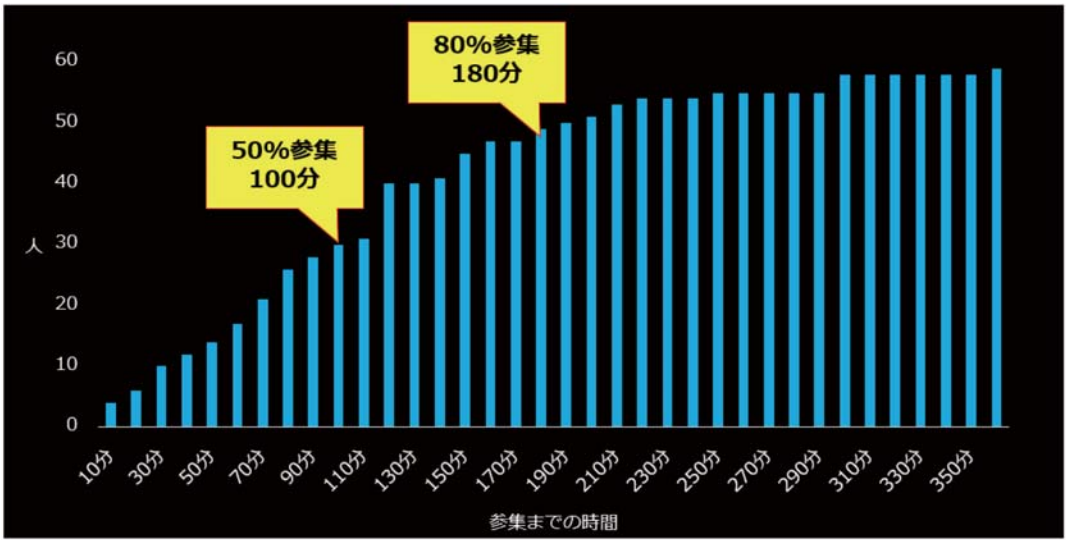

Fig.1　徒歩における自宅から勤務先までの通勤時間

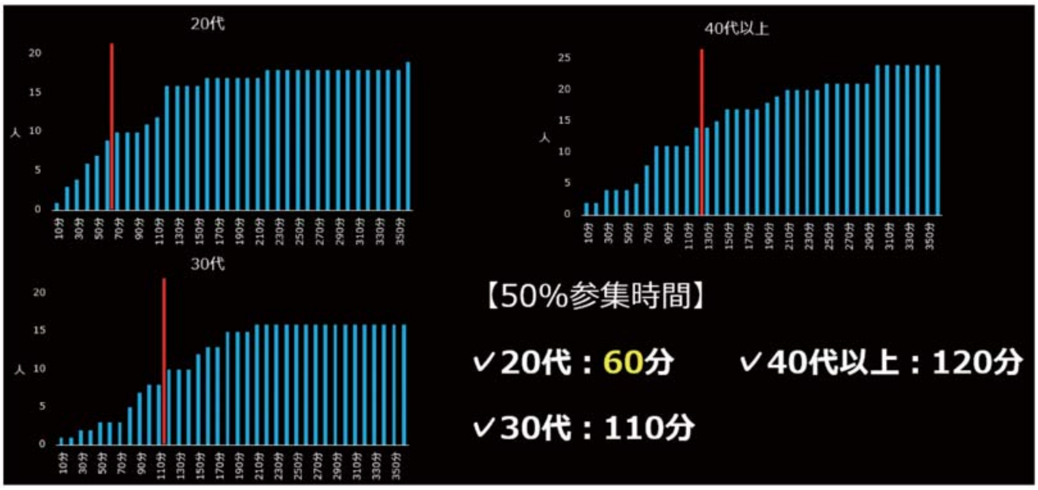

Fig.2 年代別の参集時間

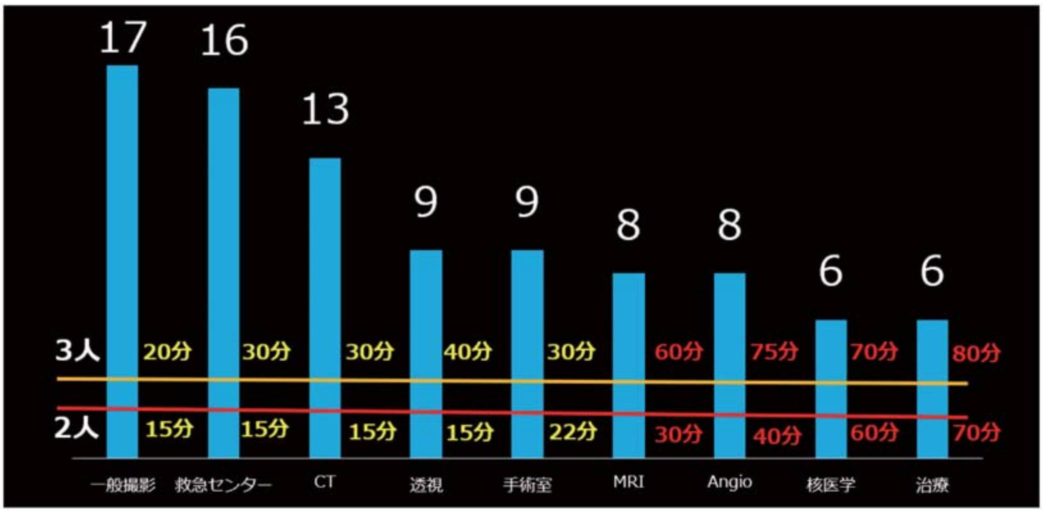

Fig.3 緊急時に点検対応できるモダリティ

ため災害時点検マニュアルの作成とシミュレーションを実施し、参集時間が比較的早い若手を中心とした災害時訓練の必要性があると考える。

【結論】

当院放射線部におけるBCP策定更新のための参集時間の調査と問題点の洗い出しを行うことができた。